TITLE:

その先を「拓く」アプローチ --学際研究をより豊かにするURAの協働とは--

AUTHOR(S):

平澤, 加奈子; 藤田, 弥世; 広田, 克也

CITATION:

平澤, 加奈子 ...[et al]. その先を「拓く」アプローチ --学際研究をより豊かにするURAの協働とは--. 2023: P47.

ISSUE DATE:

2023-08-08

URL:

http://hdl.handle.net/2433/285753

RIGHT:

京都大学学術情報リポジトリ
KURENAI 紅
Kyoto University Research Information Repository

その先を「拓く」アプローチ―学際研究をより豊かにするURAの協働とは―

平澤加奈子[1)]、藤田弥世[2)]、広田克也[3)]
東京大学史料編纂所[1)]、京都大学学術研究展開センター(KURA)[2)]、高エネルギー加速器研究機構(KEK)[3)]

本ポスターの背景と目的

●近年、学際研究（異分野連携・文理融合とも）を「総合知」と捉えて推進する動きが加速。ただし、「学際研究」という方向性は全く新しいものではなく、これまでにも数多くの取り組みが存在すること、またその多くがプロジェクトの企画や進行・運営において困難に直面してきたことも周知の事実。

●本ポスター：「分野や機関の枠を超えた研究連携活動」として、RUC＜研究大学コンソーシアム＞MIRAI-DXプロジェクト（2021年度）における事例を紹介。研究者から寄せられたボトムアップ課題をもとにURAを主体とした、多機関・多分野で連携するプロジェクトに取り組む中での経験・気づきを基に、よりよいセクター間連携を生み出すURAの研究支援について議論。

●学際研究は研究者がキャリアを重ねていく中で研究を飛躍的に発展させる強みになる一方、確立した専門分野を自身の中に持っているからこそ分野間の連携への一歩がうまく踏み出せない、あるいは踏み出しても立ち消えとなることも多い。そうした中で、専門分野を持つ研究者がその先を「拓く」ためのアプローチを「URAがどう支援していくか」という課題への一助になれば。

事例紹介

京大×東大

人における「美」にまつわる問題を多角的に検討したい

【課題設定】
「美」とは何か、美にまつわる問題とは何かを議論

【ファンド】
融合チーム研究プログラム（SPIRITS）

★分野横断PF構築事業（2022年度採択）

★HMC協働研究プロジェクト（2022年度採択）

- **一般公開セミナー開催**
- **Slackを通じて随時研究の方向や進捗確認**

- 「美」だけに閉じた問題で良いのか
- 顔貌とは何を指すのか、現実か、 絵巻物か、小説か
- 顔貌に対する評価軸は何か
- どう分析していくのか

Humanities Center

研究者の課題

URA：顔合わせ前にURA同士で数回調整

顔合わせ セッティング

URA：申請書作成とともに課題ブラッシュアップ

ファンド 選定・紹介

URA：研究テーマ調整・議論調整（URA間調整含）

イベント サポート

URA：ネットワーク拡大推進

東大×KEK

歴史史料の修復作業に対して最新の科学計測の知見を得たい

【課題設定】
当時の和紙の組成、配合等の情報を最新の計測技術から明らかにする。

【ファンド】
★加速器総合育成事業（2022/23年度採択）

★AIエコシステムユースケース創出事業（2023年度採択）

- **研究者と復元和紙製作調査参加**
- **公開研究会開催**

・和紙に対してどんな計測をするか、どんな（定量的な）結果が欲しいか
・X線CT計測技術を用いてミクロンサイズでの可視化
・赤外分光吸光装置で分子結合の確認：どんな分子が含まれるか

考察

nice! この活動においてURAが実践してよかったこと

・事前にURA同士で議論を進め、ポイントを整理
研究者自身が"自分の課題"と考えられる課題例を準備
→ その後、研究者を交えて議論

・活動中に適宜URA同士で情報交換、時々研究者の背中を押す

・少額でも良いので早い段階で研究費を確保し、
活動の大義名分の確保とモチベーションの創出

SAD 他のURAの聞き取りから見える学際連携の難しさ

・具体的な課題設定・マッチング段階での研究者間でのすれ違い
→ トップダウン型の課題設定では顕著

・本務の研究を優先することによる研究者の興味の減少、
モチベーションの維持

・プロジェクトの拡大に伴うステークホルダーの増加
→関係者間の摩擦の調整

セクター間連携を成功に導くポイントとは？

・研究課題についてURA自身が興味を持つ
→**応援団**の存在で研究者のやる気アップ！

・研究のマッチングを行う際に、各々の研究者が**「これは自分の研究」**と思える、Win-Winな課題設定をURAが率先して考える。
→研究者が進めている / やろうと思っている研究の本質を理解していることが大事。

・マッチングの顔合わせが終わった時点でURAの仕事は終わりではなく、**工程管理**が大事。
→ 完璧なベストマッチの場合、URAの支援はプレアワード程度。
→ URAがエフォートを割けない場合、最小限のエフォートで効率的に関与できるよう工夫。

・研究の早い段階で予算が獲得できると、研究を進める原動力に！

・URAが研究者の**心理的安全性**を配慮したチームづくりを進める。

・各セクター・各分野にある**ローカルルール**をURA間でまず**可視化・言語化して、共有**
→無意識に自分基準を選びがち（あるいは相手基準を押しつけられがち）なので、その部分を意識的に可視化することで、各セクター・各分野の違いを尊重する。

・学際連携では、分野によって使う単語が異なることが多く、研究者同士の議論では脱線しがち。
→URA同士で事前に意思疎通を図り、分野による研究の進め方の違いなどを事前に確認。

・相手に期待すること、相手が期待していることを把握し、研究者間のすれ違いを減らす努力をする。

・研究者個々のボトム課題を俯瞰し、トップの課題との親近性を高めて組織に貢献。

みなさんのご意見お寄せください！　お問合せはk-hirasawa@hi.u-tokyo.ac.jpまで